２０２４年０１月２５日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２６頁

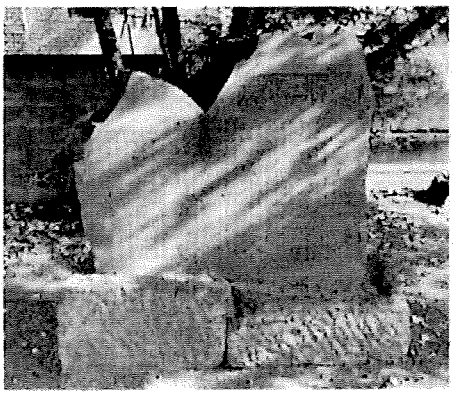
郷土の桜 桃源郷に重ね

文人の武蔵野

大久保狭南

漢文学者の今浜通隆氏は、詳細な注解作業を通じて佐藤一斎「小金井橋観桜記」を読み解き、漢詩漢文の素養が発揮された筆力に瞠目しています。また、先行する他の小金井桜道中記などを紹介し、一斎の「観桜記」との「文学性」の違いを示唆し、現地の賑わいの推移を伝える記録として用いています。

たとえば、古川古松軒という役人が書いた「四神地名録」を取り上げて、「江戸近くならば貴賤群集して繁昌すべし。世にいふ、都の花は歌によみ田舎の花は陰に朽と。誰称せる人もなくて徒らにちりうせぬべし。されども己が生活にて時を忘れず、今も盛りて咲乱れし風情、いとど優しく一入の眺なりき」というくだりに注目しています。



小金井桜樹碑。大久保狭南による碑文が残る（小金井市で）

「四神地名録」の序文が書かれた寛政6年（1794年）の頃、かつて小金井に植栽された桜花も今や素晴らしい「眺」を見せてくれるが、江戸の近くではないのでその恩恵にあずかる人はほとんどおらず、「田舎の花」でしかない。歌に詠まれることもなく「陰に朽」ち果てる運命にあった、ということになります。

今浜氏はまた、3年後の寛政9年（1797年）に、漢学者の大久保狭南が著書「武埜八景」で「金橋桜花」を八景の一に選定したことに言及しています。「武埜」（武野）は武蔵野の類語、「金橋」は小金井橋のことです。

狭南の「題辞」（漢文による説明）では、小金井橋の桜花が「鮮美」「繽紛」と表現されています。これは「桃源郷」の起源となった陶淵明の描写（「鮮美」で「繽紛」たる「桃花林」）に由来すると考えられます。

狭南は、武蔵国多摩郡清水村（現・東大和市）の出身とされます。ふるさとの風景を桃源郷に重ねようとする狭南の郷土愛がみてとれますが、寛政期のこの時点では、「八景」にふさわしい賑わいと知名度があったとは言えなかったようです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。